

風の谷のナウシカが問いかける命のリレー

～無菌主義の弊害～

野菜に同じ農薬は続けて使わない

医療も同じだ。強い抗生物質はできるだけ使わないようにする。使えば徐々に効かなくなるから。殺せば殺すほど微生物は強くなる。微生物はあらゆる命の根源でありそして終わりの局面にも現れて、新しい命に再生する。腐った世界にも繁殖して、そして浄化する。

微生物は、地球の循環、命のリレーの心臓部だ。

この働きを「風の谷のナウシカ」では腐海（腐界）という。

「腐海に飲み込まれて滅びるのはいやだ」。

人は、腐海の虫や孢子を焼き払う。でも、どんなに焼き払い、殺菌してもそこに生命の微生物が存在すれば再生して増える。殺せば殺すほど腐海の虫たちは怒り狂う。

そして、ナウシカは発見する。腐れ切った腐海の底に清浄の地があることを。

「腐海は人間が汚した世界をきれいにするために生まれたの。みんなに伝えて！腐海が生まれたわけを。虫は世界を守ってるって！」

虫や菌や孢子が私たちが腐らせるのではない。弱っているのは人間なんだと。

現実の世界では病虫害は生命力の弱い、まずい野菜を食べ元気な野菜に虫は集まらない。可能性のある命とない命を峻別し命のリレーをしているのだ。道端の腐敗した動物の死体も、数か月で土に還り再生する。ウジも腐敗菌も腐った世界に住みながら新しい命を生み、結果的にそこを浄化している。昔の人は人糞と尿を放置して浄化した。

清と濁は繋がり循環していること知っていたのだ。

しかし、現代人は自分の命の原点である微生物を消毒し、敵対化し、消し去ろうとしてもがいている。命に別条のない程度の危険に過剰に反応し、極端な安全志向の結果、生命力の弱い食べ物を増やし、ひいては私たちの体も心も生命力も脆弱になった。

不健康な食べ物で作られた私たちは、不健康な野菜にたかる病虫害のように、風の谷に押し寄せるオーム（巨大な虫）に食べられてしまうのだろうか？

殺菌、防疫のバリアーが壊れた時、人はどうやって命のリレーをするのだろうか？

狂ったように風の谷に突進するオームの大群。

「もうだめだ！」

その時ナウシカはただ前に立つしかなかった。

「ごめんね！許してなんて言えないよね」

ナウシカの深いやさしさが、多くの私たちの心に灯るとき、循環型共生社会の実現につながることになるのかも・・・・・・・・

～吉田俊道氏・西日本新聞掲載「食育革命」より転載・追補修正